

「地域で生きるを支える ～私たちにできること～」

講師 野澤 和弘 氏

植草学園大学副学長（教授） 毎日新聞客員編集委員
一般社団法人スローコミュニケーション代表

日時 2025 年 7 月 15 日（火） 9:50～16:30

開催形式（集合+オンライン）

- 会場（対面参加）：国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 401 研修室
- オンライン参加方法：Zoom

◆内容

基調講演

「本人が望む豊かな暮らしとは」（野澤 和弘 氏）

実践報告（地域移行・地域生活の取り組み紹介）

- ①GH・通所施設からの視点 万葉の里ケアホームひかり 主任 前田さなえ氏
- ②入所施設からの視点 日の出福祉園 副事業所長 田中健介氏
- ③相談支援からの視点 支援センターすだち相談員 一般社団法人ほっとけない連 佐藤弘美氏
- ④アンケート結果の報告

パネルディスカッション

進行 古山都通研運営委員

パネラー 前田さなえ氏、田中健介氏、佐藤弘美氏

グループワーク「本人が望む豊かな暮らしとは、地域で生きるを支えるために必要な事は何か」

会場 5 グループ オンライン 3 グループに分かれて意見交換、まとめ

〔報告〕

今年度第 2 回研修会は上記の通り、「地域で生きるを支える ～私たちにできること～」をテーマに開催されました。企画の発端は、地域生活支援について改めて考えようということで、植草学園大学の野澤和弘さんの基調講演、実践報告及びパネルディスカッション、グループワークという流れで研修を行いました。

今回チャレンジしたこととして、対面での研修に加えて、Zoom によるオンライン配信を行ういわゆるハイブリッド方式を行ったことです。事前準備や当日の調整を経て配信をスタートしましたが、音声クリアに聞こえないハプニングがありました。それでもしばらくして問題は無事解決し、途中からはオンライン参加者にもクリアに聞こえるように改善できたと思います。

さて、研修会本題につきましては、野澤さんには「本人が望む豊かな暮らしとは」という題で基調講演をお願いしました。野澤さんはご存じの通り、発達障害のある息子さんの父であり、元新聞記者で、現在

は大学で教鞭をとる傍ら、各種審議会や検討会の委員などを多数引き受け、積極的に発言なさり、さらに福祉団体を主催する等マルチに活動なさっています。講演では、障害福祉サービスの制度の変遷などを通じて、支援がどのように変化し、障害がある方の地域生活がどのように影響を受けてきたのか、その良さや改善の必要性などを交えて解説しています。さらに実践例を挙げて、支援の難しさ、障害の多様性、個別性、権利擁護など様々な視座から現在行われている支援を俯瞰していただきました。地域で暮らすには、利用者や家族の願いや様々な暮らし方があり、それに合わせた様々な支援があること。うまくいかないこともあるが、支援の創意工夫などで切り抜けた例なども挙げていただくなど、実践に基づくお話を伺いました。虐待防止や差別解消、新たな支援方法などエピソードを交えて時にユーモラスに表現なさり、徐々に熱を帯びて、2時間がとても短く感じる講演となりました。印象的な言葉として、このような支援に携わっている支援者自身を「かっこいい」と自負していいんだよというエールは参加者に刺さった言葉でした。

午後からは3人の方からの実践報告でした。グループホームからは国分寺市のケアホームひかりの実践が話されました。利用者と支援者が紡ぐ日々の姿が語られ、利用者と協働している様子、意思決定の重要性、利用者の主体的な暮らしを支援することの大切さが語られました。ちょっとした選択、自分らしい暮らし方、それを支援することの大切さは支援の原点であり、今グループホームの支援の質が問われている中、支援についてしっかりと向き合うことの大切さを学びました。入所施設からは日の出福祉園での取り組みが話されました。入所施設か地域かという概念ではなく、入所という形態の地域資源であるという考えで、居室環境や生活形態を考え、個室化や日中活動などを改革してきたこと、そして地域との連携の姿など、また支援困難なケースの対応など、入所施設の価値や役割を地域生活に生かしていく試みなど、今の姿が語られました。権利擁護や利用者主体の支援はどこでも同様に重要であることを再認識しました。相談支援からは杉並区の支援センターすだちの実践を伺いました。多くの事例を提供していただき、支援の多様性、柔軟性、地域資源との連携、相談の価値など地域生活支援における様々な場面が語られ、相談支援が行っていることが良く分かりました。その後都通研運営委員から事前アンケートの結果と分析が発表されました。ポイントは、本人の話をよく聞いて支援すること、関係機関との連携、サービスやマンパワーの充実などが問題意識として上がっていました。また本人が地域で役割や交流できる場があること、地域の方々に支えられていると地域生活の安定につながるなどが、地域生活が長く続いたり安定するために重要ということが話されました。

シンポジウムでは、それぞれの支援者の利用者に向き合う姿勢や利用者と協働して困難や課題に向き合っていること、関係者との連携などの重要性が語られました。

最後に一日のプログラムを聞いて、地域生活に必要なことについてグループワークで深めました。各グループ様々な感想がありましたが、利用者主体、地域で暮らすことを継続すること、社会参加支援と言ったことが地域生活では重要であるといった意見が多かったのと、支援者も支援されることが重要で、自己肯定感が持てるように自分の仕事を頑張っていると再確認できる経験が仕事を継続できる力になるのではないかという意見が出ていました。

以上のように改めて地域で暮らすことを支援するのに大切なことを考える研修になりましたが、利用者と向き合い、いろいろなことがあるが、それを利用者や家族、地域の関係者と関わりながら人それぞれのやり方で、過ごしていくのが地域生活なのだという事に気づき、支援者もその一員としてともに生きる存在として大切であることを考える機会になったのではないかと思います。皆さんお疲れさまでした。

(坂田 晴弘)

